

Title	福田徳三著 改訂増補 国民経済講話
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.7 (1921. 7) ,p.1053(141)- 1059(147)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210701-0141">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210701-0141</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あるが、本書に於ても、更に此意義を明にし、通貨膨脹の原因を以つて、歐洲から巨額なる金の輸入し來つたことの外に、(一)銀行が貸出并に預金を膨脹することは愛國的義務であると考へ、(二)實業家并に公衆が事業を擴張し、且つ自由公債を買入れることを同じく愛國的義務であると信じ、一方に(三)政府が戦時財政の必要に應じる爲めに、聯邦準備金銀行をして殊更に割引歩合を低廉に維持させたことに歸したの

は、正當の解釋と認めなければならぬ。通貨膨脹の經濟社會に及ぼす影響の善惡兩方面に就ては、ジェヴォンス、ケャンス其他の人々が千八百五十年前後に於ける金産額増加時代に研究した當時から大體に於て、型が定まつて居る。ケ氏も亦此型に従つて、第二章に於て通貨膨脹の影響を論じて居る。即ち氏の議論を要約すれば「單純なる物價の騰貴は善でもなければ、惡でもない、唯急速に物價平準の騰貴することは、經濟上に社會上に多くの患害を生ずる所以と爲る。即ち契約上の關係を攪亂し、全體

き高き物價平準を維持して行くのに、不足であるから、到底通貨を收縮しなければならぬと云ふことで、議論を結んで居る。是れは誠に正當の議論であつて、間然する所なきものであるが、一方に歐洲諸國が今日の如く金貨本位制其ものゝ本旨を放擲して居るとしたならば、以上の論點から通貨收縮の行はれることは望まれない。金産出額は近き將來に於て、戦前の状態に恢復することは望まれないであらう。然も諸國が割合に寡小なる金に對して、割合に大なる通貨なり、信用なりを膨脹させて、平然として居つたならば、通貨の收縮は百年河清を待つに類するものである。最後にケンメラ氏は通貨收縮の方法として、(一)聯邦準備金銀行の割引歩合引上(二)軍事公債の高利借換、(三)聯邦準備金銀行の差別的貸出(投機市場や、奢侈品の製造に資金を融通して居る銀行、法外なる融通を請求し來る銀行に高率の再割引歩合を課する義)(四)政府の公債發行制限等が主張されて居る。本書は僅に八十數頁の小冊子に過ぎないが、

に於て物價は騰貴するにしても、卸賣相場と小賣相場とは騰貴に遅速あり、賃銀と物價とは急速に調節されず、殊に或る種の料金は政府監督の下に在つて、調節の困難なるものがあり、賃銀の上進亦不平等である爲めに、結局社會に不平を激成せざるを得ない」と云ふ諸點に歸着する。而して近年の通貨膨脹は戦時財政の關係から生じたものであるとすれば、此事は即ち戦争に伴う經濟的負擔を不公平にしたものであると論じたのは、是れまでの學者の着目しなかつた點である。

然らば通貨收縮問題は如何に之を取扱ふ可きか。是れは第三章の問題であつて、一方にケ氏は通貨膨脹が平和時代に於ける永久の政策とす可からざることを認めて居るが、他の一方に於ては通貨收縮の弊害(債務者に對する不公正、事業の沈衰、失業、賃銀低落、勞働組合に對する壓迫等)を述べて居る。然らば此問題は結局如何にす可きものであるかと云へば、ケ氏は金の供給は堅實なる金貨本位制の下に、現在の如

(堀江歸一)

### 福田徳三著 改訂國民經濟講話

大燈閣發行  
定價金拾貳圓

其内容は頗る充實して居る。私の近頃讀了した書物の内で、全編の大部分に通じて、賛意を表し、尊敬を拂つたのは、本書位のものであつて、特に其内容を擧げ、通貨問題に就て、知見の蒙昧である我國に紹介する次第である。

福田博士の國民經濟講話が近時我經濟學界に於ける最大の産物なること固より言を俟たず。本書は博士の全經濟學體系の前半部をなすものにして、總論及び生産論に屬する六篇四十四章一千四百十二頁(五八八字詰)を收む。若しこれに、續いて刊行せらるべき流通經濟講話の五篇(流通の原理、貨幣論、價格論、所得論、結論)を加ふるときは、丁數は恐らく倍加すべく、實に經濟

學界未曾有の壯觀を呈するならん。學界及び著者の爲め誰か之を慶賀せざるものぞ。

本書はもと著者の大正五年夏金澤市に於ける講演に胚胎するものにして、其目的とするところは、普通の教育あり常識を具ふるも、經濟學に特別の素養なき一般人士をして、斯學發達の最新最高の成果に通曉せしめんとするに在りと謂ふ。而して此目的は成就せられて遺憾なきものゝ如し。著者の比類なき博覽と、その機警なる觀察力とは、一方に於ては經濟學の素養ある讀者をも、未知未聞の學說事實の送迎に遑なからしめ、他方に於ては本書をして、何人に取りても最も面白き讀物たらしむ。本書はもと講演速記を基礎としたりと云ふも、評者の得たる印象に依りて謂へば、速記に據るところ最多きは第一卷にして、以下漸次新たに執筆せる部分多きを占むるに非ざるか。蓋し第一卷に於ては縷說反覆稍々丁寧に失するの嫌あるに、其以後篇を逐ふて、内容に比して説明語數の緊縮せられて行くを認むるを以てなり。

今本書の内容に就て所見の一端を記さんか、博士謂へらく、一の獨立せる科學は皆一貫の理論に基かざる可からず。經濟學亦然り。經濟學の理論は始めから終まで、チャンと徹底した一の系統を形作つて居るのであります。思ひ付き次第に種々な事柄をゴチャンと並べたものではありません。而して其の一貫せる理論とは、經濟學に於ては經濟の本質是なり(五八八頁)。然らば經濟とは何ぞ。答へて曰く「人間が生活維持の爲めに、一定の計劃に基く目的を立て、其目的を達する爲めに得又は用ゆる各種の手段を、目的に對して比較判斷する秩序的行動、並に其行動の組織」(二〇一頁)或は略言すれば、「收支適合を圖る所の秩序的計劃的活動並に生活に於て、斯くの如く秩序と計劃とに基きて、收支の適合を圖る必要は、抑も如何にして起るか」と云へば、吾人々類が生物として、數に於て無限に増殖する傾向を有するに對し、他方に於て人類が生活資料を仰ぐ「土臺たり源たる」土

地の面積に於て有限不可増なる事實が、人力を以て之れを奈何ともする事能はざるが爲め、人類は茲に秩序計劃を立つる事に依て、其の調和を圖り其適合を勉むるの必要已む事能はざるものなり。福田博士の所見に従へば、マルサスが「將來必ず人口過超の事實が起ると豫言し、人口の將來を悲觀した」る一點は明かに誤謬と目すべきものなりと雖も、「人間は食料よりも増加の度が速かであつて、生れる程の人間皆必ずしも生延びて行けるものではない、…出生者の全部は生存を必する譯には行かぬと云ふ大事實は」人力の之を如何ともす可からざる「自然の大則」にして、人口は之を妨ぐる事情なき限は、無限に増殖する力を有すとのマルサスの説は「萬古不易の眞理」なり(第二十二章末段)。然るに一方土地收穫遞減の法則は「自然の大勢」にして、人間は到底之を全廢する事能はず、たゞ人間は其智能努力に依て、或程度まで天然に打克つ事を得と雖も、而かも遂に天然の大勢を廢する事能はず。「乃ち收穫遞減の法則は其作用を延期し

得るのみであつて、此法則の依然として、存在して居ることは我々が寸時も忘れてはならぬ所であります。」(五〇〇頁其他)此事は何れの時代、何れの國、何れの民族にも共通の點にして「云はゞ文明の程度如何を超越する一の非文化的事實」(五八四頁)なりとす。一切經濟現象は根本に於て此の非文化的事實より生ずるものなり。吾人は勞働と資本とを手段とする經濟行爲に依て土地と人口との不調和を除かんとし而して其の經濟行爲は今日に於ては企業を中心として發動するものなり。而して企業とは福田博士の定義によれば「流通經濟に於て、各種の流通行爲により、生産及び營利に要する物と人必を(生産の場合に就て云へば各種の生産要素を)己れの創意と責任とに於て買入れ、借入れ、又た雇入れて、費したるものより以上の貨幣價值を作り出すを目的と經濟」の謂なり(三九七頁)。此等企業の手に於て結合せらるゝ生産要素なるものは、通常土地、勞働、資本の三者なりとせらるゝも、博士は人間の勞働以前に既に存する土

地と、他の諸要素とを並列する事を失當となし、之に對して生産の文化的要素としては、労働、資本及び組織の三者を擧ぐ(五九五頁)。労働は三者中最も多く自然的方面を具へ、資本之に次ぎ、組織に至ては全然文化的産物と稱すべきものなりと云ふ。本書第五篇は労働論に充てられ、資本及び組織は一括して第六篇中に研究せらるるなり。

第五篇労働論の中心をなすものは労働能率増減に關する研究なり。著者に從へば能率増進の根本的條件に二あり。營養(勞銀)と労働時間とはなり。而して著者は二十年前その「労働經濟論」に於て世に教へたる、高賃銀及短労働時間の經濟を今再び論證するに、詳密最新なる専門的研究の成果を以てするなり。此の労働能率労働時間反比例の理法を、著者がマルクスの餘剩價值説駁撃の武器として應用したるは、新着眼として人の服するところならん。蓋マルクスの餘剩價值説は、労働効程が労働時間と正比例する事を前提とするものにして、労働者自身の生活に要

方に於て、其絶對的餘剩價值論なるものを、時間の延長は其割合に生産高の増加を伴ふと云ふ前提の上に立て、あるのであります。是れ明かに一の矛盾であります(七四一頁)と。

労働能率と勞銀若しくは労働時間との關係に就き福田博士が教ふる所は筆者の全然服するところなりと雖も、博士が勞銀引上時間短縮の理由を、一に能率の増進に求め、能率増進の結果を伴はざる場合には、勞銀引上可からず、時間短縮す可からずと主張せらるゝが如き觀あるは、吾人の解せざるところなり。例へば博士は曰く、「如何に人道上、道德上時間の短縮が望ましいことであつても、若しも労働時間の短いことが労働者のみの利益に合し、雇主の利益は却て爲めに害せられるのなれば、労働時間の短縮は學問上の定説公論としては」之を唱ふる事能はずと(七一四—一六頁)。然れども筆者の所見は之と同じからず。「特に雇主の味方でない如く、又た特に労働者の味方でもない」者と雖も、労働時間

する物品の生産に、必要なる労働時間を一定せるものとすれば、其以上労働時間を延長すれば、資本家の得分たる餘剩額はそれに比例して増加する事を説くものなるを以てなり。曰く「マルクスの云ふ絶對的餘剩價值なるものは労働一日の生産効程は労働時間の長短に比例し、時間長ければ効程多く、時間短ければ効程少しと云ふ事を前提とせなければ論が立たないのであります。即ち彼の申す所に從へば、六時間を以て必要の労働時間とし、餘剩價值率は、九時間労働のときは3/6十二時間のときは6/6と致すのです。即ち時間が延びた丈け生産高が其割に殖えるものと前提するのであります。然るに、事實としては労働の能率は時間の長短に正比例せず、却て反比例するものなること前に申述べた通りで、而してマルクスも其事實は十分に之を認めて居るのであります。即ち彼は労働の能率變せずして時間短縮の行はるゝ如き場合は無い、時間を短縮すれば能率は高まるが常であると申して居ります。マルクスは一方に斯く公言し乍ら、他

が爲めに蒙る健康上智能上道德上の損害とを比較計量して、後者を重しとなさざる可からざる場合決して珍らしからざるなり。予は工場法に於ける女子小兒の労働時間制限又は夜業の禁止は、多くの場合究極生産能率の増進に依ても酬ひらるゝ事を疑はずと雖も、而かも能率増進よりも更に價值あるものゝ依て酬ひらるゝ事を確信して之を歓迎するものなり。然れども福田博士の眞意は恐らく無條件に能率増進を一切事の上に置くことに存せざる可し。何となれば博士は、第五篇の末段に於て作業分業の利益を論じたる後、労働者を今日の從屬的雇傭労働者たざらしめんと欲せば、作業分業は十分行はれず、作業分業十分に行はれざれば、労働能率の増進十分なるを得ず。而も此効果を擧げんが爲作業分業を十分行はれしめんとするには、労働者人格の拘束壓迫を來すことを辭する能はず、是實に今日の經濟生活現在の産業組織の前に横はれる大なるスフィンクスの謎なりと記し、又經濟學に於て研究す可き最重要の問題は労働能率の

増進と労働者の人格的要求の尊重とが如何にして兩立し得るかの一事なりと謂へるを以てなり(八九二―三頁)。而して此問題の解決は博士の流通論出づるを俟つて始めて知る可きものたるなり。

マルクスの餘剰價值説を攻撃したる著者は又その基礎たる労働價值説をも否定す。その論に従へばマルクスの價值説は冠履顛倒の論なりと謂ふに在り。蓋し吾人が労働を費して物を生産するは其物に價值あるを以てなり。價值あるが故に之に労働を費し、苦痛を伴ふ力作を代償として支拂ふ事を辭せざるなり。故に曰く「労働は價值の源なり」と云ふよりも、價值は労働の源なりと云つた方が當を得て居るのであります」と。筆者は労働價值説の缺點を指摘することに於て博士等の驥尾に附するものなりと雖も、唯茲に博士が價值なる語に依て解するところとマルクスの同語の用法とは同じからざる事を記せざる可からず、即ち博士に従へば價值とは、或目的に對して或手段が有する意味の度合に於て、全然一

からざるどころなり。

純然たる經濟理論以外に於て評者の益を得る事多かりしは専門技術的(とも謂ふべき)細目の記述の、特に甚だ詳かなる事はなり。例へば第五章に於ける各種の耕作法の説明、第二十六章に於ける労働の生理の説明、第二十七章に於ける労働最能限率に關するレオ・フォン・ブッフの研究紹介第二十九章に於ける労働契約に關する諸國民法々規の比較評論の如きは即ち是なり。又珍らしき主張にあらざるも、著者の適切奇警なる説明の爲めに、讀者の甚だ深き印象を受くるの實例は擧げて數ふ可からず。労働と遊戯との別を論じて、遊戯の場合には「樂其中に在る」に反し、労働の場合には「樂其外に在り」と云へるが如き(六〇六頁)は幾十百中の一例のみ。巻中收むるところの肖像及挿繪は舊の分冊版に比して新たに約二十を加ふ。(就中珍とす可きはアダム・スミスの母の肖像なり。)若し茲に一人のアルフレッド・マアシャルを加ふるときは、過去及び現在に於ける代表的經濟學者の肖像は悉く

の主觀的判斷なるに、マルクスに於ては、價值は『商品の交換比率若しくは交換價值に現はる、共通物』なり。マルクスと雖も、價值を一の主觀的判斷と解する約束の下に於て論せば、恐らくその價值が社會的に必要なる労働時間に依て定まると云ふ事を躊躇したるには非ざるべきか。

價值論餘剰價值論に於てマルクスを排したる福田博士も、資本概念論に於てはマルクスに左祖して資本の一歴史的概念にして、これに絕對的範疇と云ふ方面の全然なき事を言明し(九一―九二頁其他)。資本の最終的定義として「資本とは利殖の用に供せらる、私有財産である」或は「資本とは其所有者が之を増加しようとする意志を附與した私有財産の謂である」(一〇〇―一〇四頁)と云ひ、生産要具を以て資本となすの通説の非なる所以を反覆縷説す。而して資本概念の變遷並に資本概念混雜の由來と理由との説明せらるゝ事は最も詳細なり。此一段(八九五―一〇二四頁)はクニイス、メンガー、ボエム・バゼルクの記述と共に、資本學說研究者の必ず讀まざる可

此書中に網羅せらるゝなり。(小泉信三)

### 士田 查村著 『マルクス思想と現代文化』

四六版四〇〇頁  
定價二圓八十錢  
佐藤出版株式會社

マルクス主義の經濟的世界觀に慄らずして、カントの批判哲學に其の歸趣を求めやうとするのが現代の傾向である。然し動もすると何等の理解も同情もなく一向に淺薄な唯物論を固守したり、或ひは徒に輕薄な理想論に安住しやうとする傾きがある。「我々が法律生活、經濟生活に於て不完全なる生活形態を持つて居るならば、其れは文化價值によつて批判せられ、人格性の尊嚴の完全に發揮せられざるものと見なければならぬ。」(本書前篇二〇六頁) Sein は Sollen に依つて導かれなければならない。而して人格性の尊嚴を十分に發揮し得る生産組織を完成することが人類文化の發展に最も必要なる一方面である。